
思い付き、気まぐれ作品集

カナリヤ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

思い付き、気まぐれ作品集

【Nコード】

N1129V

【作者名】

カナリヤ

【あらすじ】

ここはカナリヤの思い付きや気分を変える為に書いた短編？の置き場所です。これを作る前に書いた「闇の帝王もどきな俺」「球磨川 乙史」「IS A C f a風のタンク乗り」の3点もここに載せておきます。基本思い付きで書くんて続かないのが普通です。作品が増えることにキーワードが増えるのと統一性が無いのは御愛嬌で

……

妖怪の箱庭（前書き）

思い付きの4作目

ここに当て嵌まるキーワードは妖怪

妖怪の箱庭

どうも〱初めまして、大妖おおやしです。名前が普通はそう読まないだろとか言わないでください。結構気に言ってるんですよ？名前の由来は特にないんですけど。別に大妖怪という訳でも、妖怪の頭領たるぬらりひよんって訳でもありません。種族は妖怪ってだけと、前世が大矢おおやって名前だったから、妖あやしを組み合わせて大妖でおおやしと読むようにしたんですよ、ノリと勢いで。

「おい、そんなとこで何をしてる大妖」

白髪でそれなりに歳のいつてるオッサンが話しかけてきましたよ〱家族なんですけどね。あと、ここは山の中です。

「何って対陰陽術師の畏だけど？即死級の」

趣味の一つですよ？インディー ヨーンズを見るのが好きだったので、他の人に掛かって貰える畏を自分の箱庭に仕掛けて、人が掛かるのを見るのが趣味であって、畏を仕掛けるのは趣味ではありませんから。

「……………この前互いに不可侵略の条約を結んだのではなかったのか？」

「結んだよ？それでも、入ってくる馬鹿はいるからさ……………そんな馬鹿には畏に掛かって精々笑わせて貰うんだよ。でも、中には潜り抜ける猛者や幸運な奴も居るだろうから、そんな時は頼むからね、血桜ちくおう」

血桜はオッサンの名前ね。ちなみに血桜は刀の悪い方（人間にと

つては)の九十九神なんだよね……早い話が人間に対して禍を齎すんだよね。具体的に言うと、持てば人を斬りたくなって辻斬り(通り魔)になって、相対すればかなり高い確率で斬り殺される。完全に妖怪として独立しているから妖刀として使われる事はほとんど無いんだけど、人間嫌いだから平気で人を斬り殺すんだよね。

「他の奴にも言っておけよ、言わずとも皆協力してくれるだろうかな」

「それって、鎖錠に口上乙に銀蛇の事？」

「どうして戦闘に不向きな者の名を出す……」

鎖錠は戦えるよ？人間相手じゃ傷付けるような事しないだろうけどね。

ちなみに鎖錠も九十九神で鎖が妖怪化したモノで、口上乙は噂の妖怪で噂を広めたり集めたりするのが得意な妖怪で、銀蛇は金運を招く地味だけど凄いい妖怪だ。戦闘要員は別にいるんだよね。

「普通は朱牢鬼しゆらうきに波鱗丸はりんまるにこないだの新入りの名を出すだろ」

朱牢鬼は名前でわかるだろうけど鬼、それも典型的なね。波鱗丸は天狗だけど、別に顔は赤くないし、立派な鼻は無いから翼の生えた人間みたいなんだけど。

「血桜、名前で呼ばなきゃ駄目だよ。彼女はもう家族なんだから」

「本人が否定しているだろうが……そうだとしても、手放さないだろう？」

「当たり前だろ？今迄手放したのは要らなくなったモノと消えてく命ぐらいだしね」

ここは自分で作った箱庭だ。ここに入れたモノは手放すなんてするつもりは無い。予定調和なんだろうが、ここで生きて行つてここで死ぬそれで十分な一生だろう。そう言つてずっと生きている訳なんだけど……………

「それに、彼女には行く場所も帰る場所も無いんだから、ここが終着点でも良いだろ？」

幸か不幸かなんて関係無い。ただ入れたいと思つたから、この箱庭で受け入れるだけ。

「我が儘だな……………」

「今更だね…………ここに居る奴の大半は我が儘で居るだろ。尤も、居心地が良いと解ればむこうからお願ひしてくるさ、ここ居さしてくださいって。出て行く理由が無ければ、ここはとても良い所だからね」

妖怪にとっては人間が増えすぎて生きにくくなつてきている世の中だ。だけどここは妖怪でも生きて行けるし、自然もある数少ないそのままの状態だ。人の手が入らず、決して入らせない箱庭だ。のんびり生きて行ければそれで十分だよな？妖怪だつてさ……………

設定

大妖

いわゆる転生者で、自分について解っているのは妖怪であるという事と、自分が強い事だけ。

容姿は黒髪で肌も日本人らしい肌色で外見年齢は15歳位。顔はつり目で常に閉じているかのように見える。自分が所有する山（土地の権利所は契約の元で人間が持っている）を箱庭と呼び、そこで暮らしている。

マイペースで平穩を好み、誰かが畏に掛かっているのを見るのが好きである。孤独を嫌い、なにかしらしてない時は誰かをすぐ近くに居ようとする。男

血桜

刀の九十九神で、刀の時は妖刀として何人もの人の手を渡りつつ、人を斬ってきた。人の血と怨念を吸い続けて妖怪化したので人間には友好的では無い。性格は常に冷静沈着で冷酷。

容姿は白髪で肌は平均よりやや白く外見年齢は50歳位。顔には老人と言えるようなしわが多数あるが、体の方は現役のスपोर्टスマンみたいにしっかりと鍛えられた筋肉が目立つ。

基本的に主人である大妖を第一にし、武士のような忠誠心をみせるが、武士道などは持つておらず敵を斬る際には正々堂々とは言えない事を平気でする。男

鎖錠

鎖の九十九神で、鎖の時は人間に大切使われてきたので人間には友好的。

口数が非常に少なく、口で言うより行動でよく示す。体のほとんどが鎖なので動かたばにジャラジャラと音を立てるが、やろうと思えば音を立てずに動けるが、面倒なので夜以外はしない。

容姿は常にすっぱりと大きな黒い布を被っているので、それしか見えない。男

口上乙

噂の妖怪。在りもしないモノの噂やそれに対する人間の恐怖心などから生まれた妖怪。

生まれ故に噂を集めたり、広げたりするのが得意で、広まっている噂の妖怪などに化けられたりする。

口がよく回り、噂などの話をすぐに聞けるような仲に誰とでもなれる。

定まった容姿は無いが、基本的には時代に合った美人の容姿になる。
女

銀蛇

土地神兼蛇の妖怪。金運限定だが、それを招く事ができる。その力で土地神として崇められるようになった。

容姿は大蛇であるが、鱗は銀色で目は紅くてどこか気品を漂わせている。人の姿に化ける事もでき、人の時は20代位の美女になり、髪は銀で肌は白である。女

朱牢鬼

鬼。鬼のイメージそのまんまで、豪胆で酒好きで情に弱い。約束などをしっかり守り、律義であるが、私生活では大雑把なところが目立つ。

波鱗丸

天狗の青年。この中では一番若く、一番燃えやすい。若い為によくパシリにされたりするが、全ては強くなる為と思って日夜よく走ったりしている。

妖怪の箱庭（後書き）

出てくる妖怪の種族名のぬらりひょんと九十九神と鬼と天狗以外はオリジナル。銀蛇はぬらりひょんの孫で出てきたのを見て思い付いたんですけどね。

闇の帝王もどきな俺（前書き）

思い付き作品の一作目

内容は5月28日に投稿したのと変わってないんで見た事ある人は飛ばして構いません。

この作品のキーワードはヴォルデモートと魔法先生ネギま！
ネギま！の方は世界だけで原作キャラが出てきませんけど

街に行ったらバケモノ扱いなう。

うん、悲しいかな。こんな見た目では人間と思われないよな。蛇人間と言われた方がしっくりくるもんな。

「我々正義の魔法使いが、貴様のようなバケモノを逃がす訳がなからう！」

なにあれ。自称正義の魔法使い？人を見た目だけで判断しやがって……

許さん！！

「エクスペリアームス」

しかし、武装解除しか使わない俺はへたれだ……
迷惑料として貴様等の杖は頂くがな！！

小悪党みたいだな、闇の帝王の体なのに……
なんかさつきから足を進めるたびに屈辱感が半端無い
体が逃げずに戦えて、言ってるみたいだな……勝てるだろうけど。
人を簡単に傷つけるなんて、できないんだよ。

だけどそんな思いなんて無駄だって言うように

「死ねえ！！」

殺される。そう感じたら

「アバダ・ケダブラ」

咄嗟に口に出した呪文は、死の呪文で……

緑の閃光は吸い込まれるように、呪文を唱えていた奴の胸に命中した。

糸の切れたマリオネットのように、いきなり崩れ落ちる。

殺しちゃったよ……傷つけないとか考えていたくせに、あさり殺したよ。自分の手で。

だというのに。人としての大罪を犯したのに。込み上げてくる感情は……優越感

自分は崩れ落ちた奴とは違う。そんな優越感が心を満たし始める。気持ち悪い……

体が闇の帝王になっただけなのに、もう　　はもう居なくて、俺は闇の帝王に近い存在になってしまったようだ。

「俺様が大人しく去ってやろうというのに……貴様らが追いかけてくるから、つい（・・）殺してしまったではないか……」

残っているのは心だけ、だったら心も闇の帝王になれば楽になれる。　　が消えて残るはヴォルデモートのみ。

「全員死んでも、かまわんだろ？」

未知への恐怖が追いかけて来た奴らに、広がっているのが手に取るように解る。

開心術の一片か。基本的な能力か。どちらかは解らない。そんな事はどうでもいい……

ただ……

「なに、痛みは無い。楽に逝くだけだ」

こいつらには、俺がヴォルデモートになる肥やしになってもらう。

「アバダ・ケダブラ」

呪文の数だけ死体がころがることになった。

気持ち悪い……………

十数人殺したが、結局俺は俺で、闇の帝王たるヴォルデモートには成れないらしい。

ああ、楽になれると思ったけど。

やっぱり気持ち悪い……………

球磨川 乙史（前書き）

思い付き作品2作目

内容は6月 18日に投稿したのと変わってないんで見た事ある人は飛ばして構いません。

この作品のキーワードはめだかボックス

球磨川 乙史

やあ、はじめましてになるよね？僕は球磨川 楔の双子の兄の乙史としだよ。

唐突？こつちに語りかけるな？意味不明？そんな事を気にしてたら、創作物なんて楽しめないよ？

物語りなんて勝手に始まって勝手に終わるモノだからね。

そんな訳で短いだろうけど、ゆつくり楽しんで行くといいよ。

僕の物語り……と言うより、めだかの物語りだろうけどね……僕も弟も生まれ持った弱者で、敗者で、過負荷マイナスだから主人公なんてガラじゃ無い。

完全無欠に近いめだかの方が何億倍も……マイナスじゃあプラスでいくらかけてもプラスにならないっけね。

始まる前に僕の話聞いてくれるかい？

聞いてくれるね。友達だもんね！当然だよな！

まずは主人公体質のめだかと、どこで会ったか話をしようか。

アレとは病院で会ったね、会ったと言っても、僕は何にもしなかったけど……

だけど弟は一目惚れしたみたいでさ、意味がありそうな無意味な事を言っただけを引こうとしたんだよ。

失敗に終わったみたいだけど。

それと、病院は異常無しって判断されて行くだけ無駄な結果だったけど。いや、新しい友達ができたから無駄ではなかったかな？

その子の名前は人吉 善吉ノイマルいたって普通な男の子だったね。

それからちよくちよく、遊ぶようになったんだけどね。あのめだか

も一緒つてのが気に入らなかつたけど。

敵対していながら一緒に遊ぶ。思えば、これが中学のあの時まで続いたんだよね……そう、あの日まで。

始まりはそう、阿久根くんがめだかを壊せなくて、改心させられた事件だ。尤も、特別の阿久根くんが異常で完璧なめだかを壊すなんて最初から無理ゲーだつたんだろうけど。

そんな事があつたから、当時阿久根くんの上にいる僕の弟の襖にめだかが殴り込みに行った訳だ。最悪のタイミングでね。

ちようどその時に、弟が女の子の顔を剥がした後だつたんだよね。そんな訳で、弟はボコボコにされたあげくに、守りもしない約束をしたわけだ。

弟がそんなになつたから、一緒の中学に居ずらくなつたつから転校したんだよ。それから1度も会ってないね、善吉くんにも阿久根くん、めだかにも。

時間は流れて高校2年生になりました。

驚いた事に、僕が通つてる箱庭学園にめだかが来るんだと知つたら、学園長に頼んで表の名簿から名前を削ってもらつたんだよ。

会いたくなかつたし、生徒会長になりそうな気がしたからね。実際になりやがったシネ。

先手を打った御蔭で、知られずに済んだから良しとしておこうか。会長になってから好き放題にしてたね。普通に人の身で校舎を動かしたりとか、やっぱり友達になれそうにない完璧で異常な存在だね。

そうそう、もうすぐ弟の楔がこの箱庭学園に来るんだって、楽しみだね！きつと気に入るよ、僕の友達達マイナスをね。

『久しぶりだね、兄さん』

「ん？いつから括弧付けるようになったんだい楔？」

『ん〜そうだね。中二位かな〜』

「なるほど、中二病か。ジャンプ好きなら仕方が無いかな？」

『そうだね！理事長に挨拶したいから悪いけど理事長室に案内してくれない？』 『兄さん』

「その前に、寄りたい場所があるけど良いかい？」

『別にそれほど急ぐわけでも無いからいいよ！』

別にもう隠れる必要も、隠す必要が無いから、2人でみんなに会ってもいいよね？

「ははは、やっぱり楔は弱くて強いな」

『今回は、兄さんが居たからあまりやられずに済んだよ』 『ありがとうね!』

なんか知らないけど、戦ってた連中を2人で掬子伏せて。どいつもこいつも掬子を体に押し込まれている。

ん？

「ねえ、その君。もし良かったら友達にならないか？握手してさ」

『んん?』 『いたい誰に話掛けるの?』 『もしかして、幽霊?』

「残念だけど、嫌われちゃったみたいだね。今回は諦めるよ。でも、次はこの手を取って握手してほしいね」

残念、残念。また1人新しい友達ができるかと思ったのに。でも、旧友に会えるね。今すぐに……

奥のエレベーターからめだか達がぞろぞろと出てくる。

うん、うん。来た、来た。

「なんだ……これは……」

その疑問に答えるように楔がしゃべりだす。
今日の夕飯どうしよっかな

「実際はどうなのだ、乙史よ」

「ん？ああ、ごめん、話聞いてなかった。正直、友達でもないような奴の声って聞く気になれないんだよ。前から変わってないだろ？めだか」

「ツ！貴様！！」

「で？何の話をしてたの？善吉くんに阿久根くん」

「これを、誰がやったかです」

「ああ、そんな事。喧嘩してたから、仲良く両成敗をしたんだよ、仲間意識ができて仲良くなれるかもね。もしなったら教えてね、僕も友達になりに行くからさ」

そう言ってその場を後にする。

球磨川 乙史おとし

球磨川 楔の双子の兄 自称 友達作りの天災
身長は楔より高く、ガツチリとした体形で喧嘩などには結構強い。
二卵双生児のため、あまり似ていない
過負荷マッナス

悪友 (バットフレンド)

大抵の人物と対等な友達になる。ただし、相手がマイナスでない限り相手がマイナスまで堕ちる事になる。効果は一時的だが、個人差あるものの十分な時間を共に過ごす事によって相手をマイナスにまで完全に堕とすことができる。

IS A C f a風のタンク乗り(前書き)

思い付き作品の三作目

内容は7月13日に投稿したのと変わってないんで見た事ある人は飛ばして構いません。

この作品のキーワードはISとアーマードコア

ず無い。だが、タンク型ISはそれを何度も行っており、そのつどに戦い方を微妙に変化させている。そして今回の武装はグレネードであった。どこぞの社長よろしく面制圧用の装備である。ガトリングの使用を片方だけにして、今度は当たり易いように接近しつつガトリングとグレネード連射をする。基本は正面からの制圧、これは譲れないタンクであった。

もちろんセシリアが接近を許すはずも、グレネードにあたるようなへまはしない。元々遠距離型なのだからその辺りは心得ている。それでも、予想外の事は起こるのだが……

ドーン！！！！

撃ちだされたグレネードとガトリングの弾が接触し、セシリアとタンクの間には爆風と煙をまき散らす。ソレによってセシリアに致命的な隙が出来る。尤も、それを確認する前に果敢（無謀とも言う）にも煙に突っ込むのを気にせず、セシリアとの距離を最短で縮めべく、タンクだけに積まれているオーバードブーストを起動させる。元来出せ無いようなスピードを無理矢理出すので扱いが難しいが、直進するだけな猿でもできる。誤算があったとすれば、本当に最短距離を進んでいて、IS同士が衝突した事だろう。

「あ……………やはり、弱者は信用できんな……………」

一瞬止まったが、決闘はまだ終わってなかった。タンクはぶつかった衝撃で体制を整えられてないセシリアに容赦の無いガトリングとグレネードの洗礼を浴びせた。

「なんとこの事を……………」

どこぞの世界最強がそんなこと言ってたが、聞こえるはずも無く、

セシリアのISブルーティアーズは直すより作った方が早いと言われ
るくらいに破壊された。

御坂妹に憑依したので一方さんを殺そうとしてみた(前書き)

これに当て嵌まるキーワードはとある科学の超電磁砲

御坂妹に憑依したので一方さんを殺そうとしてみた

Side ? 07777

憑依した。突然すぎてなにが何だが解らないだろうけど、憑依した。んでもって、わし？俺？僕？私？あたし？は死ぬ運命らしい。生きてれば何時かは死ぬけど、殺されなければならぬらしい。ふざけんな！って思ったけれど、すでに確定運命だとさ。訳が解らない……。死ぬのは嫌だ。前世^{まえ}なんて憶えて無いけど、確かにあったという記憶しかないけど、そこでは命はそんなに軽くなかったはずだ。

だから、抵抗することにした。だけど、出来る事はほとんどない。ミサカネットワークとかいうのがあって、自分はそれに組み込まれているから他のシスターには居場所とか筒抜けにできたりするらしい。コレのせいで逃げる事は不可能。自由もほとんどないので、元より不可能だったんだけど。

と言うか、自分が居る場所は研究所？ミサカネットワークで聞いたら、自分はクローンで超能力が使える。カミナリパンチ、人間スタンガン、放電、とかができた時は憑依して良かったとか本気で思ってしまった……。嬉しくなってピョンピョン跳ねたり、同じ研究所にいるシスターに抱きついたりしたのは黒歴史だ。しかも、実験室でやってしまったから研究用の資料として一部始終を録画されていた……。シネ、腐れ研究者共……。

その後で知った事なのだが、本当は自分は感情が無いらしい。そのせいで？07777「バグナンバーとか研究所内では呼ばれている。それに、自分は能力の電撃がレベルで表すと4相当で高いらしい。希少価値がある」生存ができるかと思っただけれど、感情があるから失敗作もどきみたいに見られている。

《さようならと、ミサカはミサカお別れの挨拶をします》

そんな情報が伝えられて、自分の前の番号が消えるのを理解する。

「うううっ！クソっ！」

仲が良いとかそんなんでは無かったけど、同じ研究所にいて一番初めに顔を合わせたシスターだった。彼女にやった事は、悪戯としてあまり変えようの髪形を変えた位だったけど、それでも、他とは違うと思っていた存在だ。よく解らないけど、氣遣われている感じがしていた。戦う前に、ちよつとした悪知恵を授けたりしたけど、無駄に終わって殺されてしまった。

次は自分の番。そんな恐怖より、殺された怒りが強かった。元々、自分が戦う時には研究者を説得した御蔭で今までとは違う状態クセラレタで一方通行に挑める。研究者達はそれでも私が殺されると思っアているよ。うだが、殺されるつもりなんてない。逆に殺してやるつもりだ。

「殺してやる！一方通行あああああ！！」

時間なんて、すぐに過ぎてしまう。今の自分にはそれはむしろ都合だった。時間が過ぎすぎると、怒りより恐怖が勝ってしまうであろうから。準備はできるだけしてきた。

「今夜のターゲットはてめえで合ってたなア？」

「今夜のターゲットは、自分だけとミサカは答えます」

細身で白い男。いかにもひ弱そうな見た目だが、目の前の男が一方通行であるのは間違いない。情報通りだし、一般人はまず紛れ込まないはずだ。

「しかし、敵は自分だけではありません。今回の実験は、リーダー・ハンティング。多くの敵がいる状況でリーダーだけを殺すのが今回の実験。殺し方は自由ですが、殺していいのは自分だけというのを忘れないで下さい。それと、リーダーとその他の識別を容易にする為に、自分は他のミサカとは違う服装と髪形になっています。

定時まで、5、4、3、2、1、0」

0と言った瞬間に、隠れていたシスター達が5方向から消火用の放水機を使って一方通行に水をぶつける。それと同時に自分は一方通行から離れる。普通であれば、何もできずに水に打たれ続ける。暴徒鎮圧などにも使える方法であり、相手を殺傷なんてはしない。打撲や骨折はありえるけど……

しかし、水は一方通行には届いていない。一方通行が示す通りの能力であるベクトル（力の向き）変換の超能力によって、水は届く前に反対方向に行くようにベクトル変換されている。それが基本だというのだから、驚くしかない。銃などを使えば、撃った弾がそのまま戻って来るのだから、下手すればそれでお死まいになる。だ

が、放水では中らないだけだ。常に同じだけ放水していれば、相殺するだけで終わるし、反射されて中つてもそこまでダメージはない。それに、放水している間は一方通行は視界不良になる。

「ちったあ頭を使うじゃねエか？」

笑っていやがる。能力の発動にどれほどの演算力を使っているかは知らないが、まだまだ余裕があると声音で解る。

《A～E班、計画通りに放電を開始》

《了解と、ミサカ達は返事をします》

一班5人編成で作っており、放水機を使うのは2人で事足りるので、一班につき3人と自分で踝まで濡れそうな程に溜まっている水に向かって放電する。

コンクリートで舗装されている学園都市の地面は、水の逃げ道さえ塞いでしまえば容易に水を溜める事ができる。他にも、予め一方通行の周りにだけ水が集まる様にしたり、自分達には触れないようにしてあったりするのだが。

放電をぶつけられた水は電気分解をされて、水素と酸素に分離する。ただの水を電気分解するのは非常に効率が悪いが、今放電しているのはレベル3相当15人に、レベル4相当が1人居るのでなんとかなる。

《退避》

《了解と、ミサカ達は返事をします》

気体はすぐに飛散してしまう。だから、退避指示と共に手榴弾の

ピンを抜いて一方通行に向けて投げ、すぐに自分も退避する。投げ
てからキツチリ三秒後に手榴弾は爆発した。酸素と水素と一緒に。

酸素は物が燃えるのを助ける特性があり、水素は火に反応して爆
発する特性がある。微量であれば、ただ音がするだけだが、大量に
酸素と共に発生させて爆発させたので、普通だったら黒ずみか、人
の形を保って無い。昔だったら水素爆弾なんてあつたくらいだから、
対人としての威力は十分であつただろう。

「ちったア、面白くなってきたじゃねエか！」

「チツ！」

しかし、目標は健在。ベクトル変換なんてされてしまったら、ど
の様な攻撃でも無効化されてしまう。解つてはいたが、ここまで絶
対的な壁は空恐ろしい。だが、絶対的であつて絶対ではない。そも
そも、この実験は絶対能力者を生み出すための実験だ。

付け入る隙はある。あんな絶対的でも、人間だ。不完全で脆い人
間だ。反射の壁さえ越えられれば殺せる。その壁が高い上に分厚く
感じるのだが。

《これよりプランBに移行。A～E班は指定位置に移動。F～J班
までは射撃準備を》

《了解と、ミサカ達は返事をします》

「リーダーは逃げると、一方通行にミサカは宣告します」

ここら一带はは実験の為に少し前から閉鎖されている。その御蔭
で、畏を幾つか用意できた。どれも幼稚で単純な畏だが、無能力者
なら簡単に殺せる畏ばかりだ。自分はその畏を避けながら進むが、

一方通行は罫に掛かるのを気にせずに普通に歩いてくる。

鉄骨が幾つも降ってきたのに、それを殴るような動作と共に自分の上から退かず。弾薬庫のようにカートリッジや弾薬がある場所に誘い込み、入った瞬間に電撃で某発電大佐のように全ての弾薬に点火したが、全て反射されてしまった。ピアノ線もあっさりと切られてしまった。

《F》J班射撃を開始》

《了解と、ミサカ達は返事をします》

続けて一斉掃射も試してみたが、これも無駄であった。時限式のグレネードランチャーを使って、全て一方通行の手前で爆発するようにしたのに無駄だった。

《射撃中止、指定位置に移動を開始。これよりプランCに移行》

《了解と、ミサカ達は返事をします》

「なんだア？これで終いか？」

グレネードランチャーによる掃射ですらも涼しい顔で凌ぎきったバケモノが目の前に立っている。

「いえ、まだ終わってはいません」

また手榴弾を投げつける。

一方通行はそんな物は恐ろしくないのでらう。これまでと同じように気にせずに自分に近づく為に歩くが、その慢心を利用させてもらう。手榴弾が炸裂する前に目と耳を塞いで背を向ける。一方通行

は疑問に思っただろうが、無意味だ。自分が投げた手榴弾は破片と爆風の代わりに、閃光と甲高い音を撒き散らす。そう、投げたのは相手を殺傷目的の手榴弾ではなく、相手を行動不能するのを目的とした閃光手榴弾だ。音や光も反射できるかもしれないが、普段からは全ては反射していないはずだ。現に一方通行は音が聞こえているようであったし、しっかりと見えた。完全に反射されていたのなら、音は聞こえないだろうし、物が見えるのは光が物に当たって反射した光を目で取り込んでいるからだ。だから、少なくとも一定量の光と音は届くはず。

無力化ができたか、それを確認する為に振り向いた瞬間に、拳が脇腹に減り込んだ。

「ガアッ!？」

「着眼点良かったがア、それだけだったなア」

一方通行は、光で目を潰されもせず、音で鼓膜がやられもしていなかった。どうやら、一定以上は反射されるようになっていたか、察知されたのであろう。

脇腹が凄く痛い。おそらくベクトル変換で無駄に威力を上げたのだろう。

「まあ、今迄で一番頭をつかってたんじゃねえのか？オマエ」

頭を掴まれそうになったが、電気信号を作り出して無理矢理身体を動かす。少々不格好な動き方だったが、それはどうでも良い。必要なのはポイントまでの誘導。そのまま走って逃げる。だが、追い抜かれた。低空飛行みたいに足元を凄い勢いで飛んで行った。

「まだ何かあるみてエだが、そろそろ殺される」

「一方通行、超電磁砲レールガンを知っていますか？」

「ああん？てめえのオリジナルの事か？それとも、兵器の事か？」

「両方です。オリジナルと比較すると、レベル3相当で1%未満です。なら、100体以上で同じ事をすれば、数値上ではオリジナルと並べるはず。そして、自分達は数を揃えるのは簡単です」

そう言うってから、左側を指差す。つられて一方通行はその方向を見る。その視線の先には、電気を帯びて光っているモノが見えたであろう。

《充電率150%。いつでも発射できると、ミサカ達は報告します》

《発射！》
ファイヤ

逃げる。余波で肉片になる破壊力をもっているのに巻き込まれるのはゴメンであるし、自殺の為に計画したのではない。

協力兵器 超電磁砲。自分達を発電機やバッテリーのように考えて撃ち出す。原理はそのまま、砲身は鉄骨を利用し、弾丸は鉄塊だ。180人のシスターの協力で撃ち出すそれは、オリジナル越える破壊力を生み出す計算になっている。問題点は、一回しか撃てない。一発で砲身に使った鉄骨はダメになるし、撃ったシスターは電池切れになってしまう。

そんな虎の子の一撃を、一方通行は簡単にベクトル変換で上に飛ばした。反射ではリーダー以外を殺してしまうから、飛ばしても安全なのは空だけだからの判断だろう。でも、切り札をあっさりとは無効化されたのは精神的にくるモノがあった。

「今には、驚いたがあ。あれじゃあ不足だ」

ゆっくりと、一方通行が近付いてくる。そして、自分に触れた。

「そんじゃ、これではあ！？」

喋る為に口を開いたところに、ピンを抜いた手榴弾を突っ込む。

「待っていた。無警戒で、ここまで近付くこの瞬間を……死ネ」

血流を逆流させられる前にはなれる。自分の口に何を突っ込まれたのかを目だけを動かして確認し、驚愕に目をカッ！と見開く。無意味で、無駄。もう終わる。手榴弾が一方通行の頭を消し飛ばす。

はず、だった。手榴弾は爆発した。けれども、破片と爆風は一方通行の口から吐き出すように出て行った。

「体内でも、ベクトル操作が可能……？」

終わったのは、自分の方だった。

御坂妹に憑依したので一方さんを殺そうとしてみた（後書き）

電波が来ました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1129v/>

思い付き、気まぐれ作品集

2011年10月10日10時08分発行